

加藤清正の実像

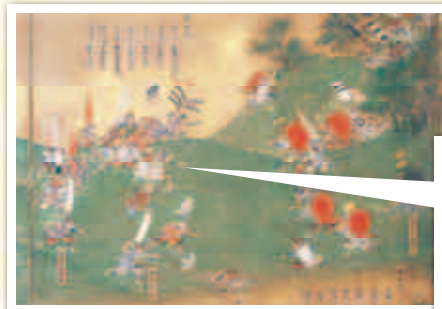
信長亡き後、その後継者を決める清洲会議を経て、主導権争いを巡って秀吉は柴田勝家との対決姿勢を鮮明にしています。そして、決戦の舞台は琵琶湖北部に位置する賤ヶ岳へと移ります。

〈5〉 賤ヶ岳の戦い

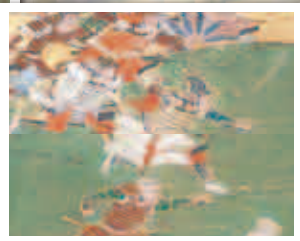
天正10年(1582)6月の信長後継者を決める清洲会議で、柴田勝家は信長の三男・信孝を、秀吉は信長の孫で当時3歳の三法師(後の秀信)をそれぞれ擁立します。会議に同席した池田恒興や丹羽長秀らが秀吉に賛同したため、ひとまず後継者は三法師に決定しました。しかし、これを不満とする勝家・信孝陣営は反秀吉勢力を取り込みつつ秀吉包囲網を形成し、これに対して秀吉陣営も独自に軍事行動を開始させ、勝家陣営の各城を攻撃するとともに自陣の勢力拡大を図りました。これにより両者の軍事衝突は決定的となりました。

年が明けて天正11年2月、ついに勝家は軍勢を率いて雪深い居城・越前北之庄城(現在の福井市)を出陣し、秀吉軍と対峙すべく南下を始めました。その頃、秀吉軍は勝家に与する滝川一益の領地である伊勢地方(現在の三重県)を攻めていましたが、勝家出陣の知らせを受けると急遽軍勢を琵琶湖方面に向かわせました。こうして3月半ばに両軍勢は琵琶湖北部一帯に布陣し、しばらく膠着状態が続きましたが、4月20日に柴田軍の先制攻撃で戦が始まります。この時、秀吉は織田信孝を討つため大垣(現在の岐阜県大垣市)に在陣していましたが、両軍衝突の急を聞かや否やすぐに兵を引き返し、戦場へ急行しました。前年の「中国大返し」に劣らない素早い軍事行動を見せた秀吉の軍勢は、大垣から木之本(現在の滋賀県長浜市)まで約50kmの道程を4時間で走ったと言われています。

さて、これまで合戦に至るまでの過程を見てきましたが、この時期における清正の行動を見ていきましょう。賤ヶ岳の合戦における清正と言えば、後世伝えられているように



▲賤ヶ岳合戦図屏風[右隻・賤ヶ岳七本槍部分]
(大阪城天守閣蔵)



▲槍をふるう清正

「七本槍」の1人として槍を振るって戦場を駆け回る勇猛な姿を思い浮かべますが、「志士清談」という後世に書かれた史料には、大垣から木之本に急行する強行軍を裏で支えた清正の姿が描かれています。それによれば、清正は秀吉に命じられて近江国中から倍の利息で金銀米銭を借り集め、木之本まで5万人分の食糧を用意したと書かれています。大垣撤退から木之本到着までわずか1日余り。この短時間で5万人分の食糧を準備したとは到底考えられず、この史料の記述を全面的に信じることはできませんが、物量で敵を圧倒する秀吉の戦争スタイルを考えると、柴田軍との決戦を見据えた秀吉が、かなり早い段階で清正に食糧やそのほか合戦に必要な物資の手配を命じていた可能性があります。

後年、秀吉が清正に与えた役割や清正自身の活動を見ると、このような補給業務に携わる清正の姿は、必ずしも史実と大きくかけ離れているとは思えません。合戦において清正が諸物資の調達や金銭の算用など後方支援的な活動をおこなっていた実態は十分にあり得ます。むしろ、清正はそのような能力を秀吉に買われて出世していった節もあり、後の清正の書状には経済活動に関する内容も多く見られ、金銭に細かい人物であったことがうかがい知れます。経済を重要視した秀吉の影響が大きかったことは間違いのないでしょう。

このコーナーは、大浪 和弥さん(元熊本博物館学芸員)が執筆しています。